

「パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。2 わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。3 あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。4 神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。5 わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。6 そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、7 マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。8 主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。9 彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、10 更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」(テサロニケの信徒への手紙一1章1～10節)

今日の聖書の言葉は、使徒パウロとその同労者たちから、テサロニケ教会の人々に送られた手紙の一節が記されています。パウロが代表して、ここで語りかけているわけですが、その口調は大変穏やかで、大きな喜びにあふれています。他のパウロの手紙と比べてみますと、このようにパウロが喜びばかりで手紙を綴ることは、実は大変まれなことです。パウロは、この箇所だけでなく、ずっと手紙の最後まで一貫してこの教会の人々を褒めているのですが、そういう手紙は他にはありません。大抵は最初だけ褒めて、後はその教会の問題となっていることを取り扱っていき、中にはかなり厳しく批判的なことを言っているところもあります。一番酷いのは、ガラテヤの信徒への手紙です。そこでは、挨拶もそこそこに、すぐに教会の人々の問題点を指摘し始めます。1章6節には、「もう、あなたがたにあきれはてています」と言われているのです。こんなことを言われたら、意気消沈してしまいますよね。それに比べて、この手紙は本当に心からパウロやその同労者たちが満足している思いが、にじみ出ている語り口となっています。8節の後半には、「もうあなたたちには、私たちから何も付け加えて言うことはありません。」とまで、言われています。「もう、あなたたちに教えることは何も残っていないから、免許皆伝だ!」、というようなニュアンスですね。こういうことを私も言われてみたいと思いますが、いったいどんなことが、これほどまでのパウロたちの厚い支持を受けることになったのでしょうか。

そこで、6～7節を見てみましょう。「あなたたちは、酷い苦しみを受けることになりましたが、それでもめげずに聖霊による喜びをもって、み言葉を良く受け入れてくれましたね。そしてそのことで、私たち(パウロたち)に倣うものとなり、そしてそれが主イエス・キリストにさえ倣うものに

なりましたね。そして最後には、あなたたち自身が、その地域のすべての信徒の模範となってくれましたね、良くやってくれましたね」というように言われているわけです。こんな風に言われたら、とっても嬉しいと思います。

それでは、そのパウロたちに倣い、主イエスさまにさえも倣った姿というのは、いったいどんな姿なのでしょう？そこが、今回の私たちの一番の関心事になると思います。9節の所を、見て頂きたいと思います。そこにはこうあります。「あなたたちは、偶像から離れて神に立ち返り、生けるまことの神に仕えるようになりました」とあります。この場合の「偶像から離れる」というところが今回の鍵となると思いますが、それはいったいどういうことでしょうか。

偶像崇拜や偶像礼拝を、一番初めにハッキリ禁じている聖書の箇所は旧約聖書にあるのですが、そこにはこうあります。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。だから、あなたはわたしをおいて他に、神があってはならない。そして、あなたはいかなる像も造ってはならない」（出エジプト20章2～4節）。これは、つまりどういうことかと言いますと、こういうことになると思います。ただお一人の神で唯一の神は、私たちが奴隷の状態から解放して、自由な身分にしてくれる神なのです。ですので、自由に導かない神というのは、実は神なのではなく、偶像なのだということです。「もし、本当の生ける神である私から離れて、あなたたちを不自由に縛ってしまうなにかの偶像を拜んでしまうのであれば、あなたたちの心が死んでしまい、そして終いには生活全体が苦しいものになってしまいますよ。だからすべての偶像から離れて、わたしの所に来なさい。そして、わたしの元にずっと留まっていなさい」ということですね。私たちが自由にしてくれない神は、偶像です。もし、今自分の状態に不自由さを感じていて、何かに強く縛られてしまっていると感じているのであれば、それは生ける神ではなく、何か違ったものに向かってしまっているのかもしれないですね。

この偶像から離れなさいというみ言葉が記されているところというのはどこかと言いますと、「十戒」というところです。生ける神から与えられた十の戒めでありますが、これは初め、石版に書かれていました。しかし、この石版を最初に受け取った人々は、それから離れて、金で出来た若い牛の象を造って拜むということしてしまいました。この場合、若い牛というのは、力とか権力を象徴しているということです。そして、金というのは、やはりお金を現しています。これらの大変魅力的で私たちに強い力で引きつけるものは、生ける神から離れさせ、私たちが奴隷のように従わせる最も強力な偶像だということですね。このことは、新約聖書に移りましても同じでして、イエスさまが最も警戒したのが、やはりお金であり、富でありました。イエスさまのお言葉に、こういうものがあります。「どんな人も同時に2人の主人に仕えることは出来ない。どちらかを重んじれば、どちらかが必ず軽んぜられるのだ」（ルカによる福音書16章13節）。その2人の主人として挙げられているのが、神と富なのです。富は「マモン」というギリシア語ですが、これは人格化されていて、神から人々を引き離す最大の偶像の神として、活発に世界中で活動している存在として表現されています。「お客様は神さまです」という言葉があります。お客が神さまなのは、お金をもたらずからですね。つまり、本当に崇め祭りたいのは、お客の方ではなく、お金の方だということですね。

ただし、これは富やお金自体が悪いわけではありませんね。お金を神棚に挙げて、祭り上げてしまう人間の心の方に問題があるのですね。お金というには、それを有効に活用すれば、真に多くの人々を幸福に導くために用いることが出来ますし、生ける真の神に仕えることにも用いることが出来るわけです。問題なのは、お金との関わり方とか、距離の取り方とかになるとと思いますが、これはパウ

口の他の手紙に、その良い例が載っています。「わたしは、自分が置かれた境遇に満足することを、キリストから習い覚えました」とあります。そして、「貧しく暮らすすべも知っていますし、豊かに暮らすすべも知っています。ものがなくても大丈夫ですし、ものが沢山あっても、それに捕らわれないで生きる、そういうしなやかな生き方も出来るのです」と言っています（フィリピの信徒への手紙 4 章 11～13 節）。

お金がなければ幸せでないのであれば、これはお金に縛られていて、支配されてしまっているということになると思います。しかし、お金がなくても、その中でもうまくやりくりして、楽しく喜んで暮らすことが出来るのであれば、偶像の神の奴隷から自由になっているということですね。それを、生けるまことの神のところにとどまることで、可能にしてくれるのだということです。

また、どうでしょうか。私は、お金の問題と同じくらい、私たちに縛ってしまう大きな力をもっているものが、この世界にあると感じていますが、皆さんは何か思い当たることがあるでしょうか。私は、外面的な美しさや醜さの問題だと考えています。特に、中学生や高校生ぐらいの思春期以降の時期というのは、自分の容姿やスタイルといったことが、もの凄く気になると思います。美しいものが善で、そうでないものは悪だというものの見方は、世界中を支配する一つの巨大な偶像の神になっているように、私には思われます。

旧約聖書の中にも、容姿について馬鹿にされるという場面が記された箇所があります。そこでは、エリシャという人物が、子どもたちに頭が禿げていることをはやし立てられます。「はげ頭、はげ頭！」と、2 回も笑われるのです。エリシャは、その時どうしたかと思いませんか？彼は預言者です。神の御言葉を預かって、人々に伝えるという使命に生きている人物でありました。エリシャの後ろから、子どもたちに禿げ頭と言われたのですけれども、エリシャは怒って振り返りますと、子どもたちをにらみつけます。そして、子どもたちに災いが降るように、神に向かって呪いの祈りを捧げたのです。すると、森の中から熊が 2 頭出てきて、子どもたちの内の 42 人を引き裂いたとあります（Ⅱ列王記 2 章 23～24 節）。

このことを、皆さんならどう考えるでしょうか。この聖書の話は大変不評でして、どう考えてもエリシャの方が悪いだろう、バカにされたくらいで何も子どもたちを死なせるくらい恨むことなんてないでしょう、本当に大人げないな、というような意見の方が圧倒的に多いです。そして、その呪いの祈りを受けてしまう神も神で、神の裁きの正当性にまで、その批判が及んでいます。そうなってきますと、熱心な信仰者の中には何とか神の名誉を守ろうとして、エリシャを弁護することを一生懸命行う人たちが出てきます。

私はと言いますと、エリシャの弁護なんてする必要はないと思いますね。私なら、こう答えます。「エリシャはその時、容姿が悪いことはダメなことなのだという脅迫観念に捕らわれていたので、生ける神を見失ってしまい、そこまで腹を立ててしまったのだろう」と、言いますね。そして、「エリシャがこの時呪いの祈りを捧げたのは、生ける神ではないと思います。なぜなら、生けるまことの神は、はげ頭さえも、とつても良いものとして受け止めることの出来る、捕らわれることのない自由な見方を、私たちに下さるからです」と、答えるつもりです。

私も段々頭の髪の毛が薄くなって来ましたので、エリシャの悲しみは痛いほど分かるつもりです。とても他人事とは思えません。自分でも、その時、呪いの祈りを捧げかねないとも思います。しかし、次のように祈ることで、醜美の基準によって私たちに奴隷にする偶像の神から解放されることが出来るのです。「慈しみ深く、悩み苦しむ者を憐れんでくださる神さま。どうか私の頭に髪の毛を

生やして下さい。そして、そのことによって、あなたのご栄光を私の頭の上で現して下さい」。そう、熱心に祈ります。そして、こう続けます。「しかし、あなたの御心ならば、この薄い頭を用いて、生けるあなたのお姿を、ご栄光を現して下さい」。つまり、どちらに転んでも、生ける神のご栄光を現すことが出来るのですね。「変えることが出来るものは、変えることが出来ますように。そのための努力をどうかさせてください」と祈ります。「しかし、変えることがどうしてもできないのなら、そのことを受け入れる勇気を下さい」（ラインフォルト・ニーバーの祈りから）と、祈るのですね。それが、何事にも捕らわれない自由な魂を、生けるまことの神さまから頂いているといて、偶像から離れている証になるのだと思います。

髪の毛だけでなく、昔の自分からは想像出来ないほど容姿が変わってしまったとか、脂肪が沢山お腹に付いてしまったとか、しわやシミが増えてしまってどうしようもないということもありますね。誰も見向きもしてくれなくなったという悲しみが、そこには沢山あることでしょう。病気や障害が残って、不自由な生活を余儀なくされて、社会の人々から取り残されて行く、全くの孤独を経験されている方も、本当に沢山いらっしゃいますね。一番辛いのは、そのご自分の苦しみを、他の人が理解してくれようとしなないということなのだ、聞いたことがあります。独りで痛みを耐えることほど、私たちの人生の中で辛いことはないでしょう。

生けるまことの神さまは、その深い深淵に横たわる苦しみからさえ、解放して下さい、自由を与えてくださいます。「誰も他の人が価値を置いてくれない、そのような体こそが、あなたにとって、最も愛おしい体なのではないですか？」と、気づかせてくれるのです。「あなたをここまで支えてきてくれて、あなたとずっといっしょに苦楽を共にして来たのは、その体ではないですか。そのあなたの体こそが、一番あなたの痛みを知っていてくれるのでしょうか？」と、励ましてくださいます。そのことを生ける神が知っていてくださるのは、神の独り子、イエス・キリストが、その身をもって、その孤独の苦しみを負われたからです。すべての人の病と苦しみをその身にまとったのが、イエス・キリストの体なのです（イザヤ書 53 章 4 節）。ですから、キリストの聖なる体は、私たちのすべての苦しみを抜くことが出来るのですね。

偶像と神の違いは、ハッキリとしています。私たちに縛り、不自由にするのが偶像です。私たちに解放し、自由へと導いてくれるのが、生けるまことの神さまなのです。「献体」という言葉がありますね。体を献じるという意味です。偶像から離れて、生けるまことの神さまに私たちの体を献じる時、私たちの心は解き放たれて自由になります。そして、その生ける命の泉から、あふれるばかりの平安や喜びが湧いて来ます。その泉から湧き出た水の流れは、やがて大きな生ける命の流れを生み出し、悩める人々を潤すことも出来るのです（ヨハネによる福音書 7 章 37～38 節）。私たちに、回復した生きる勇気を与えてくださいます、生けるまことの神さまに、心より感謝の祈りを捧げましょう。